

第6章

土地豊富経済の制約と可能性

- アフリカ開発論の一課題 -

峯 陽一

はじめに

「アフリカ開発論」の探求という課題は、少なくとも暗黙のうちに、アフリカと他の諸地域の開発課題の相違と共通性を浮き彫りにする作業を伴うことになる。かつてはアジア的生産様式をめぐる活発な論争が存在し、その変種としてアフリカ的生産様式なるものが語られたこともあった。開発の地域的諸条件の差異をめぐる議論が想定していたのは、当該諸地域における経済制度の差異、究極的には「人間行動の型」の相違であって、ここでは狭義の経済学のみならず、社会学や歴史学の方法がさかんに援用されたものであった。

1980年代になると、競争的市場の機能に至高の価値を認める新古典派経済学が、開発研究の世界でも主流のパラダイムを築き上げていく。自己利益を最大化しようとする合理的な経済主体を想定し、その経済主体の市場における選択の幅が十全に広いものであるかどうかという基準ですべてを評価しようとする新古典派の姿勢は、市場がその内部で機能する社会制度そのものを考察しようとする社会学、政治経済学的なアプローチと、正面から対立するものでもあった。

新古典派の市場理論の影響のもとで策定された世界銀行・IMF の構造調整は、改革の対象となる国々で所得の格差を拡大し、国家の再分配機能を弱体化させるものとして、各方面から批判されてきた。だが、新古典派の途上国開発論は、市場の制約条件さえ除去できればどこでも自由で革新的な経済主体が立ち上がると想定する点において、ラディカルな平等主義にもとづいている。諸経済は統制的介入の強弱に応じて分類されるのであって、経済発展の度合いが「文明度の高低」の関数だとは考えられていない。そこでは、遍在する企業家精神の力が素朴に信頼されているのである。

とはいえ、構造調整の処方箋を受け入れた国々が、特段に印象的な高成長の軌道に乗ったというわけではない。体制移行期の東欧や経済危機の渦中の東アジアにおいて、IMF が一律に課した処方箋を好意的に受け取った者は、けっして多くはなかった。構造調整の全盛期は終わり、21 世紀初頭の途上国経済論は急速に多様化しつつある。市場を取り巻く諸制度に問題があることが改めて認識され、再び経済学と隣接諸学の協働の時代が始まったのである。

この新しい挑戦には、20 世紀の後半、東アジアでは活力ある経済圏が形成されたのに、アフリカでそのような動きが起こらなかったのは何故か、を説明しようとする試みが含まれる。それはまた、個別的な政策の正しさや誤りのみならず、政策を遂行する主体そのものを制約してきた歴史的条件について考察しようという試みでもある。本稿では、制度論へと「越境」するアフリカ経済論をとりあげ、その可能性と危うさを考察することにしたい¹。

第1節 ノースとボズラップ

新しいアフリカ開発論の潮流のなかで、近年とくに影響力を強めつつある

¹ 本論は、アマルティア・センの経済理論と現代アフリカをめぐる論考（絵所秀紀・山崎幸治編『アマルティア・セン・コメンタール』に収録予定）と同時期に執筆したものであるため、内容に重なる部分が多いことをお断りしておく。

のが、新制度派の開発理論の枠組みである。取引費用の低減というシンプルで説明力ある視角にもとづくダグラス・ノースの「新しい経済史」を援用しながら(North [1990], North and Thomas [1973])、土地制度や共同体規範などを分析する業績も増えている。

ノース派のアフリカ経済論者の旗手といえば、ベルギーの経済学者ジャン・フィリップ・プラトーを挙げるべきであろう。プラトーが1990年代に発表してきた諸論考は、『制度、社会規範、経済発展』(Platteau [2000])に収められており、同書にはダグラス・ノースが序文を寄せている。

同書においてプラトーは、ノースの制度変化の視角とエスター・ボズラップの人口＝技術革新論(Boserup [1965] [1981])を結びつけることで、社会規範と経済成長の関係の一般的定式化を試みている。ボズラップ理論といえば、イギリスの古典派経済学者マルサスの人口原理が想定するところとは逆に、農村における人口圧力が技術革新の促進要因となり、かくして人口増加を十分に相殺するだけの生産性の向上を生み出す可能性があることを強調するものである。もちろん人口増加が経済成長を自動的に保障するわけではないが、人口爆発による資源の枯渇と一人あたり所得の減少よりも、人口圧力によるダイナミックな生産性向上効果に注目するボズラップの理論は、人口密度が希薄な大陸として出発したアフリカの経済的特質を考えるうえで示唆するところが多い。

プラトーはボズラップ理論を取り込みながら、アフリカの人口希少性が持続的な経済開発を阻害してきたことを強調する。ただし、土地豊富経済が土地希少経済に移行することは経済発展の必要十分条件ではないのであって、一般化された非人格的な市場倫理が確立しない限り市場は十分に機能しない、すなわち部分的で人格的、局所的な市場倫理によっては市場関係と分業の発展を期待することはできないとする(Platteau [2000: 291-319])。アフリカの土地豊富経済は、後に見るように、資本蓄積を阻害する平等主義の規範を再生産してきた。アフリカにおいて部分的に人口圧力が強まっている地域はあるが、それが革新に結びつかないのは、プラトーによれば平等主義の規範の

残存のせいである。プラトーは、こうした規範が社会の内部から変化する可能性については極度に悲観的であり、共同体から物理的もしくは精神的に引き抜かれた人々、あるいは外来者たちのイニシアチブに期待が託される (Platteau [2000: 216-36])。

はるか昔に土地の希少性という条件に直面したアジアやヨーロッパの経済は、イノベーションを通じて経済効率を不断に上昇させていく制度を時間をかけて準備することができた。急速な経済成長は社会の不平等の悪化を招くが、アジアやヨーロッパは、深刻な社会的格差の拡大を経験したからこそ、不平等を緩和する再分配の制度をも時間をかけて練り上げていくことができた。アメリカはヨーロッパで完成した制度を当初から大規模に移植した。アフリカは対照的である。外的世界から孤立したアフリカの経済は、効率性が低いと同時に再分配の制度も弱いという低水準均衡に陥っていたというのが、アフリカ = 人口希少経済論の暗黙の理解である。

ノースの業績のひとつは、現代の非マルクス派経済学研究に、洗練された経済史の視角を持ち込んだところにあるが、それは彼の欧州経済史に関する該博な知識に裏打ちされたものである²。土地と人口の関係にもとづいてアフリカ史を再構成しようとする試みは、すでに 1980 年代において、経済学者ではなく、歴史学者のジョン・アイリフによって試みられたことがある。アイリフによるアフリカ史の見直し作業は、アフリカ経済の効率性というよりも、再分配制度の方にかかわるものであった。

本論では、これからまずアイリフの議論を紹介し、土地豊富経済における貧困救済の制度的枠組みについて考察する。その後、徐々にプラトーの議論に戻り、土地豊富経済における社会的規範と経済効率の問題について考えてみることにしたい。

² North and Thomas [1973] 日本語版の巻末に収録されている、ダグラス・ノースと大塚久雄の対談も見よ。

第2節 貧困の比較経済史

イギリスのアフリカ史家アイリフの『アフリカの貧者 - ひとつの歴史』(Iiffe [1987])は、土地豊富=人口希少経済としてのアフリカの特徴が、その地の貧困の型を形成してきたところに注目する。アイリフによれば、アフリカのような土地豊富社会において、貧者とは、豊富な土地を利用するのに必要な労働(自己の労働もしくは他者の労働)にアクセスできない者、すなわち「働けない者」である。拡大家族の相互扶助の網の目から何らかの理由ではじき飛ばされ、かつ労働できない者(障害者、老人、年少者)が、土地豊富社会における貧困層のコアを形成する。他方、アジアやヨーロッパのような土地希少社会の場合、たとえ壮健な働き盛りの者であっても、土地にアクセスできない人々、十分な価格で労働力を売ることができない人々、養えないほど多くの家族を抱える人々が、貧困層の列に加わる(Iiffe [1987: chap. 1])。

アイリフは、相互扶助から外れた人々に対する制度的なケアが、アフリカ社会の内在的なシステムとしては育ってこなかったと主張する。インフォーマルな個人的善行としての貧者の救済はアフリカにも存在してきたし、存在している。しかし、アフリカでは、貧者を助ける持続的な制度や組織が発達しなかった³。

アイリフは貧困を説明する枠組みとして、フランスのヨーロッパ史家ジャン=ピエール・グトンによる構造的貧困(structural poverty)と情況的貧困(conjunctural poverty)の区別を採用している(Gutton [1971])。構造的貧困とは、個人的もしくは社会的な環境に起因する長期的な諸個人の貧困であり、情況的貧困とは、通常は自足的な人々が危機によって突き落とされる一時的な貧困である。そのうえでアイリフは、構造的貧困内部の二つの形態として、

³ アイリフはそこから、ヨーロッパ人宣教師のアフリカにおける活動を讃え、さらに慈善の世俗化への転換を記すものとしてシュヴァイツァーの奉仕活動を礼賛している(Iiffe [1987: 195, 258])。

アフリカ型の土地豊富社会の貧困の型と、ヨーロッパ=アジア型の土地希少社会の貧困の型とを明確に区別すべきだとする (Iliffe [1987: 4])。アフリカの土地豊富社会は、必ずしも固定的なものではない。20 世紀後半の南部アフリカでは、土地希少 = 人口過剰経済が徐々に姿を見せはじめている。ここでは労働できない者に加えて、土地をもたない者が、アフリカの文脈ではまったく新しい (アジア型の) 構造的な貧困層を形成しつつある (Iliffe [1987: chap. 14])。ただしアフリカ全体を見れば、構造的貧困の主流は、いまでも土地豊富社会の特質に結びついたものである。

他方、アフリカの情況的貧困の方は、20 世紀後半になって大きく様相を変えつつある。ピアフラ、エチオピア、モザンビーク、ウガンダ北部での悲惨な事例を除いて、19 世紀までのような大規模な死者をともなう飢饉はあまり見られなくなった。飢饉を防げるかどうかは、疾病のコントロール、政府の迅速な反応、輸送路や穀物市場の整備といった要素に依存する。アフリカ全体としては、飢餓がそれほど頻繁に起こらなくなる反面で、極貧層の栄養状態が局地的に悪化するようになってきている。いわば、情況的貧困と構造的貧困が収斂するという事態である。(Iliffe [1987: 225-9])。大きな歴史的流れとしては、さしあたり説得力ある議論だといえよう。

第 3 節 アフリカ史における女性と奴隷制

ここでアフリカの貧困問題を、別の視角から検討してみよう。プラトーの視角がボズラップの人口論の影響を受けていることは、すでに指摘した。ボズラップは、土地豊富経済から土地希少経済への移行という大きな流れを踏まえつつ、アフリカ内部での地域的な偏差やジェンダー間の複雑な力関係、さらには植民地支配の制度的含意にも周到に注意を払っている。なかでも、ボズラップの古典『経済発展における女性の役割』(Boserup [1970])は、経済開発において「弱者」としてひとくくりにされがちな女性の位置に関する、

アフリカの文脈での貴重な洞察が含まれている。

同書においてボズラップは、アフリカの食糧生産が歴史的に女性に担われてきたことを強調する。男性の典型的な仕事は開墾時の木の伐採、狩猟、近隣集団との戦争などであり、女性は家事労働だけでなく農耕の力仕事の大部分を行っていた。商業や交易にも女性が積極的に参加していた。人口が増加し、ヨーロッパ人の植民地支配が始まると、この構造が徐々に変質していく。男性が出稼ぎ労働に引き抜かれたところでは、残された女性が食糧生産に従事する分業が強化されたが、食糧生産部門の生産性は低位のままであった。ヨーロッパ人は条件がよい場所では商業農業を育成しようとしたけれども、技術移転の対象として選ばれたのは男性ばかりであり、アフリカの女性たちは基軸的生産者としての威信を徐々に掘り崩されていくことになる (Boserup [1970: 16-24, 31-5, 53-64, 85-9, 92-5])。

農業生産の主体としての女性の位置の重要性は、アフリカ史研究の世界でも確認されている。たとえば、大西洋奴隷貿易で栄えたアフリカ人奴隷商人は、利益があがる女性奴隷を隠し、ヨーロッパ人奴隷商人に男性奴隷だけを売りつけようとした。大西洋を渡った奴隷は男性二、三人に女性一人の割合だったとされるが、アフリカ内部に留められた奴隷の大部分は女性（および子供）であり、奴隷主の収穫を増殖させる生産者として重用された。奴隷の価格も一般に女性の方が男性よりも高かったという (Robertson et al. eds. [1983])。

奴隷は周辺化され搾取され、拘束され売買される存在だったが、アフリカ内部の奴隷制が固定的な階層制度ではなかったことにも注目しておく必要がある。土地豊富社会では希少な労働力は重用され、孤児や戦争捕虜、他の共同体からの逃亡者、追放された者、犯罪人などが、入れ替わり立ち替わり奴隷の列に加わった。そして資産としての奴隷たちは、数世代かけて、あるいは本人が生きているうちに、受け入れ社会に統合されていった (Kopytoff and Miers [1977])。アイリフはアフリカには貧者を救済する制度がなかったというが、「底辺」が常に流動し、永続的な世襲の貧困層が存在しない社会で

は、対象を特定した救貧制度が発達する余地はなかったと考えるべきであろう。

開放的な土地豊富社会においては、共同体の成員が常に分裂し離散していく傾向をはらむ。その傾向を抑止する方策として、一方では共同体への参加の代償として最低限の所得を保障する平等主義メカニズムが、もう片方で希少な財としての労働を強制的につなぎ止める奴隷制が発達したと考えることができるかもしれない。いずれにせよ、アフリカの共同体の境界線は曖昧なものであり、それは追放、離脱、吸収を繰り返す不定型なものだった⁴。そして、人が共同体の成員である限りにおいて、彼もしくは彼女は再分配への参与を期待することができた。歴史的経過はどうであれ、私たちは現代の開発課題として、こうした実践の含意を探っていく必要がある。

第4節 「分かち合い」の原理

アイリフによれば、何らかの理由で共同体の庇護を受けられなくなり、かつ労働にアクセスできない人々が、アフリカ型の貧者を構成してきた。そうであるならば、共同体の庇護の空間を外延的に拡大していくことで、極端な貧者も極端な富者もない平等な社会を生み出すことはできないか。

その種の実践として知られるのが、かつてのタンザニアのウジャマー社会主義、すなわち共同体の相互扶助の倫理を国民国家のレベルに擬制的に拡大した社会主義の試みである(Nyerere [1968])。文化大革命期の中国と友好関係を結んだ数少ない国のひとつタンザニアでは、農村重視の平等主義が国是であった。国民は家族であり、土地は全員のものであり、女も男も力を合わせて労働する。共同体において知恵を蓄積した老人は長老として尊敬される。

⁴ 土地豊富な世界において流動的な社会集団が離合集散を繰り返してきた内陸アフリカの歴史については、東南アジア世界を指し示す「外的フロンティア世界」の対概念としてのアフリカの「内的フロンティア世界」の特質を描き出した、掛谷[1999]の議論を参照せよ。

他方、同胞を搾取しようとする者は嫌悪され、野心的な萌芽形態のブルジョアジーは寄食者として政策的に叩きつぶされた。

そこには、「働く者は報われるべきだ」という哲学がある。とはいえ、アフリカのミクロな村落レベルの共同体において、東アジア流の「勤労の美德」が一般的だったかという、そういうわけではない。土地希少なアジア社会における共同体原理は、フリーライダーを防止し、灌漑設備などの公共財を効果的に維持し、取引費用を低減する合理的な機構として機能したとされる。ところがアフリカ型の平等主義のもとでは、個人が他者よりも多く取得する富は、革新や労働の結果というよりは「偶然の幸運」の産物とみなされ、「分かち合い」の対象となる。共同体に帰属する土地の個別的所有（コモンズの分割）は抑止され、資産の担保価値も発生しない。こうした「分かち合い」の機制は、厳しい自然条件と低位の技術水準に規定された所得変動を与件として、ミクロな共同体が編み出したリスク回避機構であるが、同時に企業家精神を抑圧し、資本蓄積を阻害するものでもあった。再分配の強制によって成員の生産性向上へのインセンティブは減退し、過少生産が一般化する。その背景には、土地豊富社会では長期にわたり、投入財の効率的な利用を考えずとも、粗放的な農業実践の外延的拡大が可能だったという事情があるとされる (Platteau and Hayami [1998], Platteau [2000: chap. 5])。

以上のような論理にもとづいて、アフリカと他の地域の人口密度の相違がもたらした人間行動の類型的対照性を重視する新制度派のアフリカ開発論は、遺伝子の優劣によって生産性格差を説明する粗野な人種主義とは一線を画すものであり、人間と環境の関係性の変化に着目した合理的解釈を強みとする。しかし、同時代のアフリカの「平等主義」の実践を、土地豊富経済のもとで形成された平等主義的伝統の単なる「残滓」と捉えたとしたら、開発の重要な契機を見失いかねないということにも、注意を払っておきたい。

たとえば、現代アフリカの都市や農村では、葬儀などの不意の出費に備えて加入者が資金をプールする互助講や会員制の庶民金融の実践が広がっている。グラミン銀行などの実践に直接影響されたわけではないが、女性を担い

手とするものも多い。こうしたミクロな実践が意味のある規模で生産的投資に向かうのか、市場を機能させる信頼形成に結びつく萌芽的制度になりうるのか、あるいはフォーマルな分権的社会保障制度の先駆けになりうるのかどうかは、ガバナンスの安定性にもかかわる問題であり、まだ判断を下せる段階ではない。しかし、少なくともこれらの実践は、旧来の共同体的秩序が機能不全に陥り、もともと不十分だった国民国家レベルの社会保障も崩壊するなかで、リスク回避の制度的空白を埋める「下からのイニシアチブ」として形成されたものである。

社会関係資本としての信頼は、無から生まれるものではないが、伝統の直延長線上に成立するものでもない（絵所[2001], Collier and Gunning [1999]）。甦る「平等主義」的实践は、単純な人口増加のみならず、自然環境やインフラの劣悪化、人口移動、ジェンダー関係の変化、構造的失業といった要因がもたらした不確実性の増大を背景に登場したものなのであって、その可能性と限界はあらゆる予断を排して丁寧に検証されていく必要があるだろう。

おわりに

人口希少経済に照応するアフリカの平等主義的規範は、アフリカ経済を低開発均衡状態に縛りつけたとされる。これとは対照的に、東アジアや南アジアの土地希少経済に照応する共同体の規範、人々の態度、そして諸制度は、農業部門における飛躍的な生産性向上と金融市場の深化、取引費用の低減を可能にするものだったとされる。

だが、数十年前までの欧米の知的言説においては、救いようのない二つの後進地域として、南アジアとアフリカを単一のバスケットに放り込むのが、かなり一般的な慣行であった。西欧的知性のアジア観といえば、開発論の文脈ではミュルダールの『アジアのドラマ』が大きな存在感を有していた時期がある(Myrdal [1971])。南アジアにおける人間の態度と社会の制度は近代

化には不適合なものであり、それらは循環的・累積的な下向運動を生じせしめる。社会には規律が欠け、国家には改革の実行力が欠ける。南アジアはノース＝ボズラップ型の問題意識においては土地希少型社会を構成するはずだが、ミュルダールは南アジアの制度改革の未来には著しく悲観的だった。農業部門の技術進歩については、人口の多さが不平等を生み、それが農業技術の革新を阻んできたという理解である(Myrdal [1971: chaps. 5, 16, 21])。

ミュルダールの理論のなかには今でも傾聴に値するものが含まれているが、『アジアのドラマ』から三十年を経た今、当時と同じようなニュアンスで「アジアの停滞」を論じる者は多くないだろう。NIEO（新国際経済秩序）の時代には、国際政治の舞台における旧植民地の発言権の増大を快く思わない人々の間で、「熱帯は暑いから人々は働かない」といった評言がもっともらしく流通していたものである。しかし今、「熱帯は暑いから工業化は根づかない」などと言えば、無知を笑われるだけである。マレーシア人よりもスウェーデンの方が勤勉だというわけではない。

アフリカを対象とする新たな制度論が運命論に収斂していく兆候をみせる今、アフリカには本当に未来がないのだろうか、と問うてみたくもなる。日本の開発研究においてアフリカ経済論の「体系」といえるものを残したのは、今のところ赤羽裕に限られる（赤羽 [1971]）。大塚史学の流れをくむ赤羽のアフリカ観は、アフリカに特有の態度や制度が経済発展の桎梏になっていることを陰鬱な筆致で繰り返すものであった。赤羽のアフリカ型の伝統的人間類型は、これも人口密度と関連するが、根本的には分業の未発達に基礎づけられているという理解である。ただし、赤羽が伝統墨守というときのアフリカ共同体のイメージは、暗黙のうちに、個人主義の不在という日本の精神風土における封建的共同体のイメージを外延的に拡張させたものであって、アフリカのフィールドワークの経験がある者からすれば相当な違和感が残るだろう。ただし赤羽の論理は、新たな人間類型は局地的市場圏の形成という内発的なプロセス - 「国民経済」の形成 - を経て生まれるしかないことを強調するものであり、その点は、アフリカ社会に内発的な変化の芽を認

めないプラトーの論理とは対照的である。

西洋世界のアフリカ観は、〈後進性の悲慘〉と〈原初の輝き〉のあいだで、振り子のように揺れ動いてきた⁵。日本はアフリカの植民地支配に手を染めたことはないが、西洋世界の思想と植民地実践を規範として受け入れた近代化の過程において、西洋流のアフリカ観を多かれ少なかれ身につけてきた。日本のような後発資本主義国における知識人の発展段階論へのこだわりは、「近代化への意思」の裏返しの表現なのかもしれない。日本型のアフリカ経済論を再構築していこうとすれば、この国が社会制度の類型論や発展段階論をどのように受容してきたかについて、過去に遡って掘り下げていく思想史的な作業も必要になることだろう。過去を十分に意識化しないと、無意識のうちに同様の陥穽に落ち込むことになりかねないからである。

[参考文献]

< 日本語文献 >

赤羽裕 [1971] 『低開発経済分析序説』岩波書店。

絵所秀紀 [2001] 「アフリカ経済研究の特徴と課題」(平野克己編『アフリカ比較研究 - 諸学の挑戦』アジア経済研究所 2001年 所収)。

掛谷誠 [1999] 「『内的フロンティア世界』としての内陸アフリカ」(高谷好一編『< 地域間研究 > の試み(上) - 地域の中で世界をとらえる』京都大学学術出版会 1999年 所収)。

栗本英世 [1999] 『未開の戦争、現代の戦争』岩波書店。

< 外国語文献 >

Boserup, Ester [1965] *The Conditions of Agricultural Growth: The Economics of Agrarian Change under Population Pressure*, London: Allen & Unwin.

⁵ 栗本 [1999] はアフリカ人類学の蓄積を念頭に置いて、ホップズ的人間観とルソー的人間観という二つの系譜を対比させつつ、双方ともにヨーロッパ人の自己認識を「未開社会」に投影した本質主義として退けている。

- [1970] *Woman's Role in Economic Development*, London: Allen & Unwin.
- [1981] *Population and Technological Change: A Study of Long-term Trends*, Chicago: University of Chicago Press (尾崎忠二郎・鈴木敏央訳 『人口と技術移転』 大明堂、1991).
- Collier, Paul, and Jan Williem Gunning [1999] "Explaining African Economic Performance," *Journal of Economic Literature*, Vol. 37, No. 1.
- Gutton, Jean-Pierre [1971] *La societe et les pauvres: l'exemple de la generalite de Lyon, 1534-1*, Paris: Societe d'edition "Les Belles Lettres".
- Iiliffe, John [1987] *The African Poor: A History*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kopytoff, Igor, and Suzanne Miers [1977] "African 'Slavery' as an Institution of Marginality," in: Igor Kopytoff and Suzanne Miers eds., *Slavery in Africa: Historical and Anthropological Perspectives*, Madison: University of Wisconsin Press, 1977.
- Myrdal, Gunnar [1971] *Asian Drama: An Inquiry into the Poverty of Nations, An Abridgment*, New York: Pantheon (板垣與一監訳 『アジアのドラマ(上・下)』 東洋経済新報社, 1974年).
- North, Douglas [1990] *Institutions, Institutional Change and Economic Performance*, Cambridge: Cambridge University Press (竹下公視訳 『制度・制度変化・経済成果』 晃洋書房 1994年).
- North, Douglas, and Robert Paul Thomas [1973] *The Rise of the Western World: A New Economic History*, Cambridge: Cambridge University Press (速水融・穂本洋哉訳 『西欧世界の勃興 - 新しい経済史の試み』 ミネルヴァ書房 1980年).
- Nyerere, Julius [1968] *Ujamaa: Essays on Soccialism*, Dar es Salaam: Oxford University Press.
- Platteau, Jean-Philippe [1990] "The Food Crisis in Africa: A Comparative Structural Analysis," in: Dreze and Sen eds. 1990b.
- [1996] "Physical Infrastructure as a Constraint on Agricultural Growth: The Case of Sub-Saharan Africa," *Oxford Development Studies*, Vol. 24, No.3.
- [2000] *Institution, Social Norms, and Economic Development*, Amsterdam: Harwood Academic Publishers.
- Platteau, Jean-Philippe, and Yujiro Hayami [1998] "Resource Endowments and Agricultural Development: Africa versus Asia," in: Masahiko Aoki and Yujiro Hayami eds., *The Institutional Foundation of Economic Development in East Asia*, London: Macmillan, 1998.
- Robertson, Claire, and Martin Klein eds. [1983] *Women and Slavery in Africa*, Madison: University of Wisconsin Press.